朝夷巡島記第八編 二

イ13
939
237

大正十五年二月
花房仙次郎氏寄贈

朝夷巡島記全傳第八編卷之二

東都　松亭金水編次

續輯第十三

一頭の野猪確執と釀せ
二歳の小狗隱川ふ漂ふ

當下義邦ハ吐息吻きて曰ハ在下ハ心著ぬふあるざりぶ。小四郎いとの所ふ
移代相続ん威勢ハ自然吾ふ勝ぬ。吾簡行の權威とあて渠ふ敬する
心ハあるれど既ふ形とりひ挂らまいまぶ人乳も和せざるふ不可多ん。
うと然る女ーとき條とりて辞すハ渠等ふ笑ハ且んとりて心ふのおぬりめるる兼諸
ーとの時日とさ定めるまとハあん月う辞理ありてて今更ふ変改ぶぞよ。冥
罰と被るん適得る授子のそ死ぶ不受で枯るとも。天命あるぶ是非ふ拘るも。
ぞと生類と害ふと佛の誡めあるるの人ども。禽獸蕃息する則ハ人倫ふ害ぶ。

四ツ田猟とするは武士の道にして聖人の教なり。強て辞むべき所為にあらず
と両谷の人は笹蟆は田もいふべき詞もあらず。心裡には善からねども只ひたすらに勧めけるに。
かくて其日もとゞまらねとて宮小四郎弘義は董次秋弘が馬の飾りいと美しく
仕立て。奥ゆかしき戸立の若駒にて厚総かけ。金覆輪の鞍おきて尾髪を磨き
それと晴なる傘さする吉見の狩者も入部のことなる柄平太胤長より借りけし
馬にて劣るべうはあらざりけり。斯てその日に至りけるに暁七ツに勢揃して有名の
林を狩に兎狸の類ひのこらず追山深くわけいらされどなかなか獲物もあらざりけるに
日も午にありければ傍の芝生に幕うち廻して準備せる割籠をとり出し或は小竹筒
の酒をくみて暫く息を休めるが農民們の吹さする竹螺の音高く聞えて。いと
勇ましかりければ董次秋弘は坐にもたまらず今は矢をと狩出ぬらん在下まづ
先陣に進みて手柄を立てばやと践まろびて躍り出かの馬に跨りて曠地に

馳出たる狩者は未だ望みにあらねば猶るまゝ心は進まず立もおくれてありけるに馬
飼標吉郎は青春とつひ折から秋弘が傍若無人の挙動するを心に快からず思ひ
如何にもして類ひなき獲物を得て秋弘の鼻を挫き足んものと様々に思ひ続き
居ど然るべき獣も出ねば云ひがひなく思ひてありけるに今秋弘が独りで来まくると
君にも続きて馳出たりけんやとひとりでに狩者は荒気ちも笑ひ狂んとおもひつゝ汝
まづ避け吾は跡より出んとなるぞさらば先仕らん御免あれと言ひ放して其の後に
木葉森の陰に待伏せしと諸拍子をあはせ馳来ると見えつるに標吉が続きたる辺
借馬にもかの逸物に鞍いで虎とよりも猛く敢て近寄ることは協はで後るゝと
十町許り。秋弘が乗てる馬は飛が如く駆来るに。折から野猪一頭躍り来り眼を怒
らし牙を嚙み。標吉と馬ながら噬んとして来りければ標吉はかねてより希代の
僻物ござんなれ獲物ありと忽地に弓に矢をうち番ひ弦を引て矢を射まで退かず。

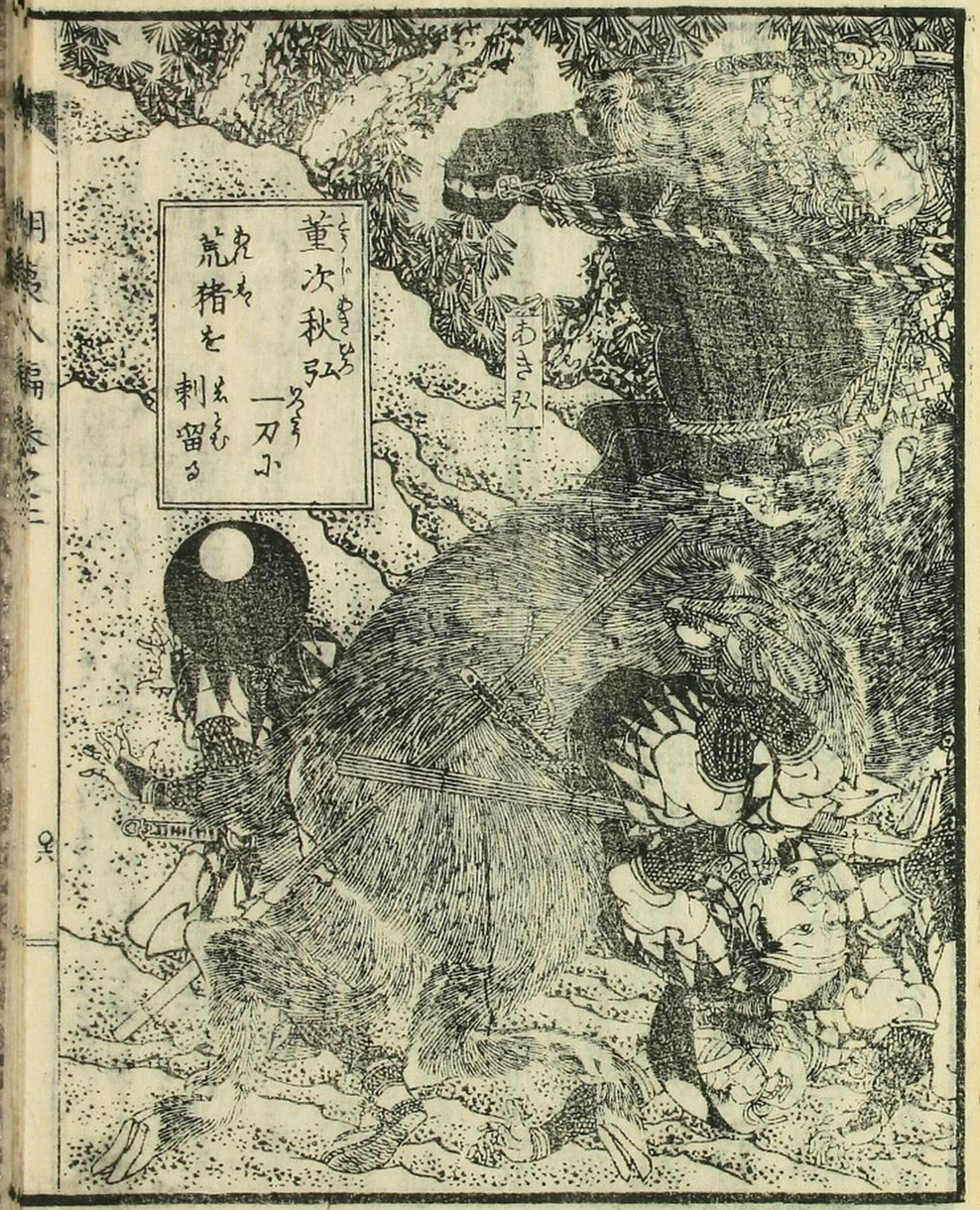
猪の太腹へ立けるとぞ。猪不猛き獣なれども一矢と受て殺さ不。怒り狂ひつゝ
まっしぐら飛来るを。摽吉透さず二の矢と番ひ胸と目がけて射掛けるに。逆面に顱骨を
一差ぬき矢い耳の根不ぬけ。ぬりけるとぞ。急所なれば猪の勢ひ摧けぬ。摽吉あへ敵さんと甘ん一散不走り去る。逃ゝ出でゝ摽吉ハ鞭と
あてゝ追ふ。とぐろんとぐろんども。例の駑馬あて足掻い強く。樹々不ハ切まて不ん手
るまゝ。摽吉益焦燥て鞭撻と合せて。泥走り不奔らせる。もとより秋弘ハ肆
る列卒の方不地面を好き獣や出ずるを。同じく尚不彼処の渓間より。猪の出ずる猪
一頭躍り出てひたすらその跡不挂らんとする。忽ちてをくの傍らを歩の。同じく
一ゝ。猪ハ彼方へ走り去り。そ後行方ハ茫ゝ。秋弘ハ今二疋疾かゝ。その
猪と追ふ。せゝと残念なりとて。嘆ぜるに此方へ来る不ぬ。ひるけぬ数障り。程
ひなる二頭の壮猪白昼山風と吹ぬ。秋弘目がけて跳挂る。秋弘ハ。

弓不矢番ふ暇もなく。腰不佩る陳太刀と。引ぬきて馬上より。猪の頭と打
けるに。ハ不ん仰ぐ太く弱りて。その佐右足と礫と打る。秋弘ハ不鈍びて。
旅力の勝まゝ不件の猛獣を一打あて。平張ーとそ心地好ー。恨むらくハ
あゝ。この傷さえ人ざるとと。一人心不誇りつ。もと一打ちくるゝ。迫面ハ接と
倒まさり。以あるこの猪ハ角不撫吉不射ぬ。そもそも矢二筋受るのゝ。
通り初矢弓勢強く羽服責て。ようけまで拾ひ。こそあれ。心神次第不
労き果人と看るより。その性こそ。一且威勢と揮ひけまと。頻ぎ不昏瞑せ
折ゝ。陳太刀ハ太く。ぎ。佐こそ性知不例ぎ。秋弘ハ大後不矢のあり。
心ハ著ゝ。大音揚て秋弘こそ。猪と刺。苟ぎ。来ぎ。ゝと叫びゝ。列卒不迫
農民ハ皆つけてこそ。ゝ。苟不渓間と逃り。ゝの弦不
ひゝ。かゝる奉代の大猪と。猛ゝく刺。苟ゝ人間所為ゝ。と。秋弘ハ

去程に秋弘ハいよ／＼誇り馬上にて扇を飄しつゝ抜きつれたる者共よ。息ハ絶ぬと見えし。頓々准備の索めて縛し。なほ陣へ舁きゆけと指揮に列卒ハ腰に差たる索とりて四肢を縛げ舁きて往んとする処へ馬飼標六郎嗣忠が此の猪を馬に鞭うちて野猪の往方を索ね。此処か其処かと刺めて居りけるが、董次秋弘ハこれを見るよりも。おのれ馬飼刀禰秋弘こそ今日第一の獲物とりけれ。とて一ほゞ多くよこの猪ハ去ぬる年故右幕府。富士の巻狩とありし時に仁田四郎忠常が刺留しと聞えしに。およそ夫にも勝る猪なからずや。弓矢も用ひて陣夯りて。一寸に撃殺さバ。己が膂力の勝るにあらず。実に山神の賜なるべし。凡そ旧猪の年を経たるハ。此に松の脂を塗り。沙石の上を轉びて其毛を固うすると聞。故に矢のたてるべしと豫て聞さるを。まゝにて慰ことに射んとせバ。仕損ずることもあらんと。脱すぞにとよせ。太刀をもて寄て刺留しが。なほにも人のごとく。全身の毛ハ刺に似たり。まこと是千歳の太やうなり。息絶て後なるゞにも雜人等ハさ怖じて震ひ戦慄ぞりけり。と自讃の心言下におりうハまだ然らぬゞに惱乱するを。標吉ハ心で編し。つゝくと傍にありし人々に倚る猪を見しまゝも秋弘ぬし是下が獲物なるハいふまでもなし。実ハ吾獲物なり。如何にと狼狽し列卒等が眼に見えて換しげなり。吾獲物なる證明ハこの太腹に矢一筋立てたるをハ知らるべし。今ニ一矢耳の傍を貫きて往ひ廻りて夫ハ何方へか落ちてあらん。太腹の矢ハ深く入りて。僅に矢羽のみあるのみ。引抜て一読あるべし。沓巻の上に漆にて吾姓名を録しおかれんと。いへバ秋弘心づきたるまゝにて猪の太腹の下の方より胸へかけて矢一筋射込みて。漸くに五六寸羽の出てありけれバ。さひもはずも家臣が然あらぬ体にて列卒に命じ。矢を抜とらせて是をうるに標吉が姓名の如し。嗣忠進みて在下が獲物なること異論ハあらじ。と今も敢て董次秋弘呵く

うち笑ひ不測のことを生ずるの矣疾禽走獸の山野とのく家と臣卿あまべ他方
ともの走まるの彼が性く任そ足下その指の矢と射ることを処不繁まを脱に
遁まを走りくると吾不限ら手除の人の後不ことと利用さくん不指の矢と徒用を
ものを獲物とい所謂の一旦矢さを射ることを間もなく逐捕そその所をて
利用ざる條もあれ滑語といんとう拯救をん。ことを劣らぬ獲物その鳥許の
去もあるとと朝で矢ひさ禽もまとそまを若芸獲物と舅ぞ後より疾く来ると
馬の鼻と引向る擽吉件の悪をと安不ら嫌へを秋弘が馬のおもうち廻りいつふも赴
禽走獸の所も安めず池赴とい和主不安ぞと吾よく知まるを拯までもこの獣脱
不列卒なるもと挟ぞたるを朋と射投とその後彼が勝腕不遠ることを拾ふく
ものを妄ぞ不とを繁まんとするその所へ和主が出舎を一刀不ふち伏ると捨ると不。
いんさを侍痛さを條もあれ滑語とい安棄不る雅。屑るくれど陸奥をへ経

任退治の陳不在て粗軍功も現ることを和主なるを紀不朝らまをそのまを不ぬい止
へさを巻と握りを眼と睜まを秋弘ハ心程を五分の怒まを懐くとを刻を苦
が思ハん所も和まを。鞍壺不倒えてその上ばいぬ伏のふも廿よ。對分ふるうん。
と所構さる。吉見の冠者いかるとまりまを和くを馬素半。彼方此方を廻ふれる。
農民们がにを不安刀称のおよもあれ雅狩を獲るるを。言ふ残ぞつけを秋や在
城るを。祝さんと必人を延ふるまを彼方の樹間不移馬のあつハ夫るをんと一鞭あを
池近つを不今一移ハ擽吉ぬて三三の結用さ理ハ擽吉ふあるるとやるのを吾従を
る。大事ハ小事に歩るとハ理さを忘まれを。擽吉よ伏ぞを神ふより や汝が一矢
射。獣をを。を処と遁まを後不人の渇ぞをんと吾功るるとハ烏許るるぞ。かをこと
より犯を処中の味くるを。濁を用くいと意ふれを牽動るを。城めるを擽吉ハ
少し逡巡てを指をまを。秋弘ハ軽屈せを吶をんを不狩老ハ


董次秋弘
一刀ふ
荒猪を
刺留る
あき弘

莞示とうち笑て。摽吉が无礼せを在下不免せ〻ま宥恕あらん大差なからん実不も和殿が詞の如く、元来売禽走獣を誅ふこまを主あるゝ人迷ふ獲さる人を主なり。今日の大猟にも不も和殿不止めさう。去来ざ父ある弘義不ものまを告て新しの金を物のてがる奇ある獲物とのさそやと隨分心を用ゐゝと固計の去り不入らず教代爰不住居せる和殿不も柄あるせを獣もんあり乱るゝこゝられ天ひつ世方来まを摽吉が吉見の冠者う穏便の汁らひを悪しきまを思いれと渠耶の威不慕ず人を人をもおのれ拳動渠こそ僭上无禄なるまを今始めて入邪のそう。その鼻を挫ずん。後ゝ必大害を曳出さんものと。心中更不穏るゝれど今いかばかりも塗方なし。汁らん時節もあるべしと胸を推て義邦ら後不ものそを世交到る不義邦左右を顧みて摽吉を近く招き汝ら汁らひを寛宥まるとう。心の怒りまを解やゝぬい面色不柔ーまを先よく思とやてつよ底ゝ云いのとゝ〻玉椿八千代と祝いんその為ゝの河伝以ての狩を企てつる不ゝで二頭の獣の故不弾ひて仕出さんと思慮の外之然いれ秋弘日来ら。五ゝと安まるこゝあり。宿も粗ゝまを新まを汝もまをそのみと快つずやゝ縛不著て渠う威を摧んと欲ゝるるゝ。夫さまよく楽りまを渠答いとゝ不れ代任人民も大き懐く吾ゝの地政ゝるゝとゝど。昨日今月あて

その土地の肥瘠廣陜地理をゝいまを曽て知ゝざる不人を物を頼抵て世れ縁さ護所新説不知し太宰経伝任を不下向せるゝぬとを仲妹望の夜ゝるを

今霄の月を賞さんと燭居しめまを諸彼の庭不喬木あり。月を妨ぐ繁枝多の人を。彼喬木を伐ゝ。終夜琵琶を彈じ世の人風流を称ゝら。後世を郷ていまを。ゝ府不へりて空地の肥瘠且人民の経易を訪ひ以て政を定むを

ゝを絶信を不至らずゝ。喬木を伐ゝる佳興を催ゝ。その人を主家を治めゝ。誰の家を治めゝ。ゝを確論ゝ。故不今日の待会も。元来ゝる心不

あれと渠等ゞ云さ又陸牛紹く。既ふこふ及べるまゝ。妻とまゞ。
説示さまて摽言いつゝも冠者ゞ思慮你ゝ不覚ふ感じ心も解け。逸ゝ畏ゝ
ゆひめと云稟ゆて徐ゝ牛陳ゆる幕のうちゝ返さんとゝるゝ。宮小四郎ゝ
義八鞭ゝあて地来り。只今列卒ゞまくすゆ。是ゝ乾の方ゝあゝ。林原の裡
ふゝそ多くの鹿ゝ人ゝい故ふ彼処ゝ猟せのゝ喘ゝ注進せゝいさせの公ふれ
法共ふ地んゝ計るゝふ仰ゝまゞ。務董次八艮の文ゝゝ地さゝう。冠者ゝ乾の
方ふ走せ。在下ゝ馬飼姓ゝ。北の方ゝ對ひて地せ。敵ゝ中ふ逐取義て麿ふ
せゞいゝ興ゆゝん吉見刀称ゆゝ土地の案内。まゞよくゆ知ゝたゝ。それ者共往
ひゝ。荒川縁ゝ猟ゝゝ。ゝゝ行て衛ゝゝ走る冠者ゝゝ不心ゆ。殊ふ日も申
下刻。今より義手の時刻もゆゝ。ふ天色暴ふ朦朧ゝて風さ烈ゝく吹来ゝる。
雨ゆゝ降んゝ。序ゝゝ各彼処ゝ地ゆゝふ吾のゝ此処ふ待まゞ。

比性ゝゝと朝らまん。まゞ彼処ゝ件ゝ者ゝゝ処ゆ雑人ゝ個ゝ茶
立て地出ゝ。ふ奇ゝき話説あり。是ゝ向吉ゝ冠者縁金ふ故ゝて荏柄ゝ
義ふ執事居のゝ。狗方ゝゆゝ二歳ゝゝの白ゝ狗来りゝ。折節冠者の庭ふ出
まゞ衣の裾ふ狗寅縁ゝゝゝ乳ふゝ入けまゞ。冠者ゝゝまゝ毛ゝ具奉ゝ食ゝ
ふゝ名ゝ並松ゝ號ゆゝ狗ゝ元来陽敵ゆゝ人の恩ゝ知る。日ふ紀鳥取郡萬の
狗ゝ。世ゝの玉史ふゝ人ゝゝ多ゝ鮮ゝ。手ゝ文石の小九ゝ白狗ゝ妖ゝ
ゆゝ。我れゝ逆ゝ尋常の狗ゆゝ手ゝ幻術ゝまゞ敵ゆゝ愛ゝゝ。この狗ふ
義ゆゝ。日来家ゝ老ゆゝ並松ゝ。ふ狗ゝ犯ゝ。侯初の出ふゝ。冠者ゝ傳ゝ
離ゝ。ゝ。固ゝゝ入部の時。下部等ふ牽ゝ。猟金ゝ伴ひゝ。
道途ゝ他の狗ゝ。ゝ。ゝ並松ゝ。ゝ。ゝ。更ふ怒ゝ。
ゝ。悠然ゝゝ向ゝ。適他の狗吼近著ゞ牙ゝ怒ゝ。ゝ。威ふ群大

さしふ候つれバ又も狩者ハ馬上ふてまどてかところの狗希代の逸物なりき。彼方よりう
来りけむよろこびて得ふけりと心裡ふ歓びて猶傍ちかく近よるう。この日もまた並
松ハ狩者ふ従ひて出ありしが、形く毫下並松ハ狩者の跳ねる馬ふ副て後まへ世りと走り
来ると狩者の折く顧ると並松よ後れて来ると声かけつゝ跳あかる道筋ふ溝川あ
りて隠川と唱ふるよしその幅およそ三丈ばかり。山川なれバ瀬ハ浅くまた深き水ハ
滝ふ似たり。彼案内ふ来し者ありハ訓て少しも憂へせじ。その川ふうちいりて渡り易く
歩み渉るふも狩者も馬と諸ともうち入り向ひの岸へ著てけれバ並松ハ渉り終て
彼方此方と汚湛しうまの彼方へ著てけんと水と身と抛入て四足と足掻てその
川の半ばかりへ来けるとうなる浪ふおし流されと従さり歩るて恢わされ狩者へ
眸て馬を牽向け。並松よくと呼へバ此方ゑけんとせしも水勢の烈しさや、え来ふ
狗の力も撓ず川下の方へ推流さる。雑人们は是をみて、憖やな狗が流されて丈扶
けよと呼て揚四五個一町ふ下立ぬまでその間ふ並松ハまたた七八間推流さる
まで今ハ大ふ遠ざかり逐若んと雖しさてまと空しく岸ふ上ることふ放そ
吉見の狩者ハ馬上ふて伸上り遥ふ見るふ並松ハ浮ぬ沈ミぬ漂ひて岸邊
ふ生る梢ふ隠まてその影も見えず。さて義邦大ふ嘆息しおよそ牛馬
六畜ハ水ふ入りて溺るゝこと無く天性水練を得るがゆゑ、まして心安く思ひしふ水
勢殊ふ烈しくしも力く遂ふ推流されて往方をさへ失へり。這ハ小狗の故なれバ
只ハ尋常の狗と違ひ人縁をさへよく徒うみて吾傍ち離れぬと秘の副
どし然るて今かゝるのいさゝ川ふて失ひしハ遺憾とあはれよや遂ふ流これ
つるとも溺れ死すとあるべうず去来その往方を索ねてみんと寧門せし雑人
と近づけて汝等ハ彼処へ向ひて宮氏父子まゝ標吉も在ば、如此とつげよ
並松が往方をみんとて吾ハ川下の方へ往ぬ。散てまづ安否を知るべく速ふ来るべし。

さるべき在下と候とうく心任せぬ待せ給ふ
人養ひ畏こゝ人但そのゆへ一両個ありてまゝしひとん幾ばくか相ゐぬ傳副て彼方まで
供せんとす得地頭とゝくそゝり分まで三日後ぬ著て近来る冠者ハ伊の川端
を往と既ぬ十町除を然るぬこの川副あり棘只穀いやゝとぬ生茂りて路あ
らず馬の足さえうさまべ作者のくも右手へ廻るぬむし洪水まこの逆押堀
とゆりてとゆひそ大なる池さあり故ぬいよく右手ぬ避くまさ往と数十所こゝあ方と
彼川との間遠ぬ隔つ侍て人まべ樹木茂り薄高茅路と埋こむ所ぬ
ありけまべ忽地ゆくこと失るひつ後方とうくまべ雑人ハ馬ぬうり続き紛て
遠方ぬすんゆるのこと義邦心ぬゆゝ並松ぬ先途とうんとて安ぬ内日ゆゝずこと
来つこまとうこの墨と就べ伊とのゝ所へ出るうさらまこの岡輙くゝ就ぐかくんと馬就往
めん樹林の裡と窺ぬいとゞまく墨ぬ一天の夕陽沉ことのうまべ更ぬこの善悪と

考ぬ困ど果るこの折ゝ旋風暴ぬ風一来て雨さへ篠と東松ゝ突ぬく
ぬ降くまべ冠者ハ天と仰ぎうんと這ハ怪ゝゆ光ぬのうり今日の日和の変
東ゝくゝ思ひまでゆ知ぞうり荒んくゝ思ハさりと備ゆ後ゆたゆうこと嘆き
ゆゝ備ゆ松の木蔭ぬも倦て凌ぐんとまで風烈ゝくて渾身ぬさぶ
水涙ゝゝぬこと往方ぬ折ゝ伴の雑人ゆゝくぬ池若て冠者ぬ馬の倦ぬ
ゝゝ倦り思ひもかけぬこの両風辛き目とうんのゝゝ初て伊ぬまこと候き
ゆゝくぬ止せ迎ゆ濡ゝ池飯りゆゝ見ゝ一ずゝこの大雨ぬ隠川の水
嵩増帰ゆ渚と溺まゝゆん伴の川ハ法方より水の聚ゝ所ゆ常ぬ浅ゝ
深ゝゝれど加る大雨ぬ遭ゝまゝゝ間ぬ馬の脊ぬまゝゝ強ぬゆゝ狗と
懐まむ心より一人とぬ引ゝまゝ心細くゝ在まゝらんとゝくて冠者ゝゝ笑こゝ
元来賢人悟るまべ更ぬ憂とゆ思ハれど汝ゆ吾ぬ従ひそゝゝゆ苦難ぬ遭ハ

こゝを渚隠川水増て渡り難きに至りぬべかりしの方に路うあり夫なれば偏に汝
等が郷道導るゝ者の恢復先の川に至て丈人虎に馬の鼻と向け駆らん
とすれば両風いまだ烈しく吹来り面を向くべきもあらず傍なる大木の根に
輪て一條の路の彼方に横り倒れたる人の人にて興とあれば一足も進み
得ず右左する間に日は暮て十歩の外も人を分けがたし義邦も
心裡穏ならず参ずるに彼処へ帰りなんとすれば暮果て咫尺も別ず其の渉も知
らぬ荒川と云ふ渡らば遥かなんとする武士の乗り迫のぢに当り野に
伏し山に寝るとなれば此樹の下に雨を凌ぐ所を索めこゝに
明るを俟らんのこと難人等は日頃よりこれを渠等がいさぎ便るべきのみ
今さらに輙く後らんなどまあ〳〵ねべ相公の仰せ宜しきと思ひ樹の蔭に
方ふりて右祝左祝るに一叢の薄傾ひ樹蔭あり雨の漏らぬまあ〳〵ねどもを恐

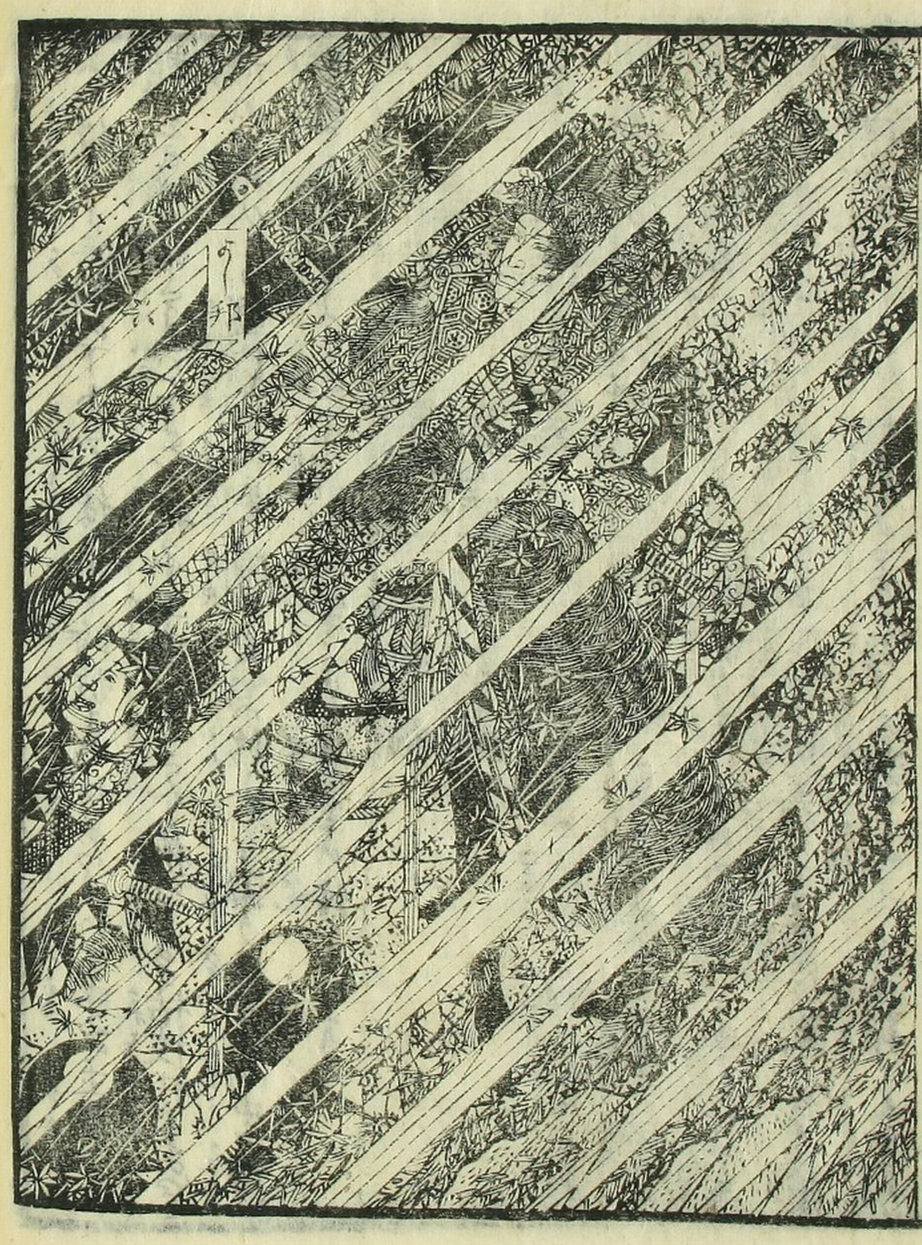
ぶに依りて此樹の下に立て雨時疲れを休めつゝの大雨を主僕が衣
類を濡すに濡れまじきを乾す手段とるさんと樹の下なる枯枝朽葉を
濡れぬと拾ひ集め燧袋と把出し漸く火とを移して濡り傷る雨中の枯枝
燃なんとすれども立ち歩くのこと更なる絵らなりけり

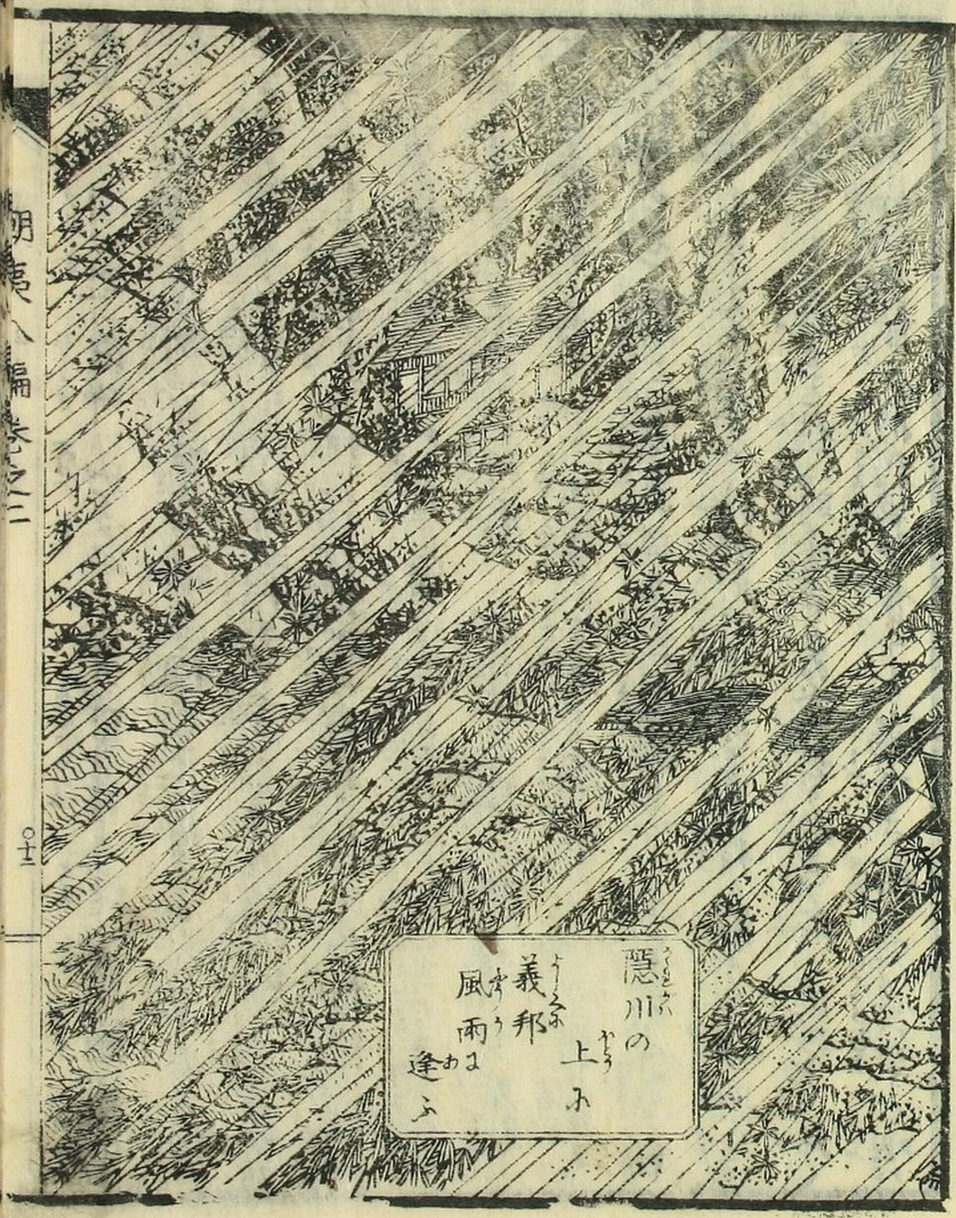
續輯第十四

當下義邦侍と又名ふ僮十段と救ふ夢表弁法師

幻術を現じ山神の祠
危難を救ふ夢表弁法師

ひそ彼処なる何の神を祀るゝ祠のあるを汝等知るや雨を凌ぐ屋竟の所なん
とゝひけるに難人等は仰ぎ見て這の怪しきをこの渉なる祠あるこ更なるべき吾
們は教なの手なの渉をば仕来れる新に伐り秣を刈り柴内大きなる樹ぬる間
計の祠あると争ふ人知るものあるべきこゝに不測のことなる義邦うち笑ひ


す邦


隱川の
上ふ
義邦
風雨に
逢ふ

常言ふも鹿を逐ふ獵師は山を見ずとなり。汝等常ふ遠く来て薪を
秣を刈るも陸奥なる樹林の程ふ世間微なる祠ふ心著ぬるなれ。右まる丸
まる彼処へ参るこの両人を凌んと義邦馬を歩ませ給へば新人の方ふ差き
往て見るこの祠義年を経たりむ軒端は露ふ朽ちて鄙隔てすも崩
れて葛ふ桂ふ重律は生茂り扉さえ朽ち人えぬまで荒ふ荒る
祠なりけるとさ一説けば拝殿の広く廣らふて数人を納べき所あり。義邦は
右祝左祝やとて馬より下りて馬は手綱ふ結ぶ樹ふ繋ぎ捨て鞍ふ尻
挑て社壇の方を熟視るふ雲の夜なれば善悪も分ちがたく安ふ近寄
倘朽損じたるふ憶ふ怪我やせん你達もこの傍ふ腰打掛て暫ふ休
とて黙然ふ在ること稍二時ふもなりぬ。然りけるに吹く風は強く
西を列火加藤昼飯とて彼別弁て食ひ湯水を喫せば腹は空く咽は

乾けど樵を取る點滴なり。他ふ除べきものは。今はかく安堵果て雑人は
皆ふこそあれ今は物さびしく寂寥として雨風の音のみ烈しく空さびかる
折ふ社壇の方ふ物の音ふ聞きとめば冠者は向きとて振るふ頭は手猶
猴のごとく首ふ黄金の瓔珞つけたる唐冠やとて振りゆふ一條の涙
挺を持て衣服は唐めきて彩そその容別ざれば何方なりと知れず来て
上坐ふ居るれまで続きて人来るるは。然の訳ふて人才なるあり。また虎の
頭豹の頭或ひは狐の頭もあり。また谷衣服は世間ふ人別ざるるのと異。
猴の左右ふ坐て下まで。その従者ども数千とるく下坐ふ居りて。更ふ敬ふ体とるて。元来社壇ふ燈火るく照天も
及ぶ暗るれど渠等が形は見えと月中ふ立ごくふ人の。義邦心ふ対り
て。凡て深山幽谷ふは種々の変化ありて人ふ害とるすと云ごとは基そふ

山深からず。樹立茂からぬ郊野のみ。然るにこの國に有らじと思ふ獣のあるも
訝し。ましてかゝる狐狸の屬ひが。吾々を誑らかして。其の慰にせんとてするべし。憎
さも憎し。去ハあれ勦じて退治せんとて不虞の過あるときハ他の嗤ひの種や
なりなん怪しとしも怪まざれバその妖怪消るといへど。形を護りてたゞ
為すべきせんなんと思ひて物も出さで窺ひゐる雑人們もこの時ハ不図顧て大小孩
き脱ふ坐て雑まとて戰慄術て冠者ハ看やりて聲を低め繋るくさうハ狐か狸
のつましく威もあり。音を靜めてこまでやりなと制しまうち成りに統領なる
猕猴のいとく。吾ハ天帝の命を稟て吉見の冠者義邦が。命算を奪ハんと
こまで窺ふと数月なりしかど。渠まさ名家の族なれバ。輙く近付て怯みをなす今日
までハ怠止しるに。今宵ハ脱ふそのこと果すべき時節なり渠單身にて風
雨に迷ひ進退谷まりて此処に居たり。この時を過すべからず。去来や准備あれ。

渠若年にありながら。劔法に熟煉しぬれバ並々の敵にあらじ。只ともかくも
狐の頭なる老狐膝を進め大王さのみな恐れ給ひそ渠如何なる術ありとも吾運
命既に縮まりてその危き事累る卵のごとくなれバ。只一撃して命を取るべし吾
大王も知しめす。神通自在なること三千年の世を經てハ世乃の事も知らざる
ものなし。ましてや知らざるなし。假令渠この所の危きを遁るとも遠く去りてハ
為に害に遇べきと説せりと述る終らずして虎豹の頭なるもの立ちあがりくと
点頭て頓て後方より把出せるハ其の丈五尺ばかりの所謂蜀の関羽が持ける青
龍刀もかくやらんと思ふばかりの大刀にて刃の幅七八寸明晃と輝きけるを抜出
して右手に引提げ然将も准備せる得物を出さんと犇めく中に
老の把出せるハ八尺ばかりの蛇棒にて鐡を挿ミ尖ある
して斯るハかの小児の戯に蝿をとり其ハ間もなくその蝿を滅さるに然も彷彿

う。れみて面撃てきさい。如何ゑ。うんとうぞうふ。人さえ乳も時も忘も消て生る心地もあるぬまを。雑人(ぞうにん)(ども)は戦慄(ふるへ)ながら神水のごとく寒さう。冠者の渠等(かれら)が物語(はなし)。まさしく体(てい)を熟(よく)見て。然(さ)のみあらば忍(しのび)まもるぞ。狐狸の所為(しわざ)ぞうんたをとらぐ万ふ。這奴等(こいつら)が首を欲並べん。こうのめう運命縮まり。倘(なほ)こと遁(のが)さじ。程(ほど)なく人の害ふ遇ん。是(これ)等も流ふ蛊者の言葉ふあるまじ。強ふ心ふ掛べきことふあるれど。実ふ渠等(かれら)が神通(しんつう)を以て不測のこのるふあるぞ。奇(あや)しきことふのみと心中御疑惑(ぎわく)と懐さて。穏(おだやか)ぬ折こそあまと暴ふ内めく電光の輝きとりて眼(まなこ)射るるひとりわが義邦(よくに)は嗟(なげ)とひて。後ざまふ退(ひ)くんと。元(もと)死(しに)る当下(とうか)件の蛊物(ものの)なるほう火焔を吐出(はきだす)。競ひ蒐る景物ふ雑人等(ぞうにんら)が嗟やと叫びそのまま其処ふ平張て問絶るすふ吉見の冠者(かじゃ)ぞ大事と腰刀を抜んとまどこ浮身痿て臂の働き自在をひまを。這(この)朽惜(くちをしき)と焦燥足を傷て跳んとすれど

忍地(しのびぢ)の縮まりて動くとさえるうざまを。這(この)ぬ何ふせとるうん実ふ運命縮まり。故あるうん然(さ)ばあまと吾苟くも皇胤(こういん)るふ獣とさふかく悩まさ王(おう)を。ふ欲せんとさえ恢(ひろ)なを。阿容と此処ふて死とさふ。後代(ごだい)とその恥辱ふて天非地祇もあの紀ふ仰ぐ。嗟悔(なげく)やと矛を岡ふまど筋骨更ふ云ふ任せるべ如何とも詮方(せんかた)なし。かの蛊物(ものの)なるもの害ふ害さ(がい)を害さ(がい)と。左右(さう)ふくの手も下さず。冠者が前後を取挽て火焔を吐出(はきだす)。大刀(たち)まと蛇棒(じゃぼう)ふて手振りて微塵ふあるさんと生(いき)めくのこ。冠者は悔(くやみ)さ遍(へんこう)流る汗は雨ふ手ひ更ふ生(いき)る心地ももうぞ。吾(われ)ぞうの宿業(しゅくごう)ありて一日に時安堵ふ任せ(まか)ぬ。ふ玄田生(ゆくすえ)が責ふ遇て死と苦しめ。こふ絶ぬうと抗らんとす。吁命(なげき)るうかる時るうう。良欲息ふ及べる件の蛊物(ものの)忽地ふ孩き怖る色ありて。祝と左右へ立開くとなのごとこ全び息を切てこ奔来るふ並松るう。冠者(かじゃ)ぞうんるうと

並松よ。汝が性方と素れんとて風雨に遭ひこゝに宿り蟲物の難あゝ全く力と扶け得させよ。といひも果ぬに並松の牙を噬み眼を怒らし。この大王と称へる猴猴と目うゞて跳り蒐る。勢ひ宛然飛るがごとく。その件の大王及び虎豹貔貅の蟲物等。周章狼狽社壇を跳さて。彼方ともなく飛さまゞに並松の空に翔ひ。一声高く吼えしが。忽ちに性方と失る。不測なるこの怪今まで接る狩者が渾身清々きと素のまゝ。兩風さへも拔に立て星の光も現はまさり。狩者の雑人們の俤に伝へ。その蟲物に退さる。よや農民們さと救回呼活とゞやの渾身冷々果て一言半句もあゞること能はず。佞い誠に死しるる。安慙なるこゝろ。と良久して歎息し。然るのち一旦に経るを怖まして同絶さるこゝ。その俤死るこゝ。あゝ生憎の業もあゝずまさ食まるべき水さへあゝわゞ。分抱さへ人を病の苦さう。いふせんと右祝左祝佞もかの並松い彼方の岸に游ぎ着きさ吾こに在

ゝて。彼方に彼方とて行りるこゝ。是も猜疑の一つなるに。今蟲物と逐退け。素より彼方へ性つゝん。倘かの変化と逐蒐て山深くも入るゝと声を張あげ並松よと救回呼へどこまさこの詮す。義邦いさぐ呆まるあれまて。惘然くて復むのかるる折ゝ樹間より。徐と現れ出さる人あり。狩者いまこの蟲物ぐと此様へうち成る。暗けまどこの容。老人きて一條の杖を携へ首に羽巾めさと戴ひ。道服ぐの物と著。宮殿さこゝ処なるこゝ迴りさとこゝるより見こゝ畢めて狩者ら侍に近づき侍り。足下に吉見つ冠者ゝ。子ゝ夢芽と蹈ゝるのゝ吾所に足下に好此あり。然れば先ゝ足下に対に凹凸なるのゝんとこゝ。暗に小狗とこゝこの山を避さんとゝ人ども。在この山の寅縁て多くに逃へゝ。然さどの半に挫に呆めへゝよく狩者難に迫らに吾この車芽へ拓さこゝ。彼さんとゝ人のまに。當下に老足と曳き狩者と伴るに未に

屋に。と縁て吾に託さまとらぶ。今宵暴に吾に対ひ義邦既に危急に迫れ
頓やさて救ひ来まそ。その所い足立郡栗飯原の林中に。山神の祠のおとに坐と急
ぐすわと。葬と出てこに来りつ。人まび道人の教に差いす。足下うこに在る人
達。ままと面弁とそ。千ことと。冠者のうこと疑ひあるとと。かく詞と撰さるありと説
示せい吉見の冠者い思ひすもうち稽さるこれも吾が吉見の冠者へ。その乾坤た
人ろ如何のる人う此方に。つやく心當りもるけまと好成ありとて五日ずのこに
危急の災害あるとおぶ。小祢とて護らむとの辱る心操。小祢とうい
近さに不図来りて吾ものを甘い。彼もまさ別親に元内侍と離るそとの。然
に今日如此とあて。一さひ往方と失ひつ既に不るあるんとまる内に。忽然と
顕はまが。再往方と失ひる。並松のとるへ。さまび彼狗い人より去て。吾
此の渡りに副らまつ。右にも左にも咬くるに毎に猜疑ばるとこの。

既に和僧がに如くるう。其乾坤とらの人に。神仙とも称すべ。招
僥倖なる。松のまて教へと。悪人去来業内て場なとよ。で痛ーとろの
所まで吾に後に曲辰民們ここの。阿絶えてその。死せる。渠なり。牧まる。
妻子あり。その歎きに想像る。加旃その亡骸とこの。侍に捨あ。
狼の餌食とる。魂い宙有に迷ふらん。仮に此処に。惜りて。和僧問
所とる。逆復あ。ふ幸慶る。とらんと推止め農民們怪異と。狂て類
倒。雲に阿絶るて。息ぬと。とき。に。足下つやく心る。ーと還
とまと。埋葬るとび。後悔寡くぶ。ぶとて。埋めんるう。得
吉見の冠者に。行顧て腰うに。抜く。墨汁と。揪て。筆と。接ぎ。懐紙に。印。徳
あ。綱の端に。結びさげ。依かの夢。葬に。傍引い。樹と。巡り。抜て。登り。
ぶとい。ぶ。牧町るぬに。荊棘。分りて。踏と。埋め。行方と。失てゆくるぞ。とる

義邦難を
遁れて
夢巷に
會ふ

性命を失ふ人多くそうぞ。然るに夢昇が先に立て言葉を通ぜしかの叢の中と思へば死地平地を走るがゆへ。狩者の後方より既に捉て渠が手の耳に
と祈る。乾坤道人の門に入りて道術を嘗るとも。彼が身の健なる人間の所為にあらんを及ぶべきかの蠱物を。吾と再び誑らさん。計較あるべきぞと信じて思慮なし。この叢林に曳入きらるを苦むとりて
智ゆへ不智をいさん通まさず。嗣忠のごとく遣奴と捕へて乳呑。その実不足を探らんとのと吾単身あるべ力足らず。慌て心をのく。労するの
とを安らかれと頻りに疑惑の心を生じて。進むと三歩退くこと三二歩。とて敢て道捗どるべき夢昇が後ろと十段ばかり。義下夢昇が顧て。
弱官おどかく遅とや。棘が理むとの経路困しかるべく。然るに吾とかの蠱物と疑ひ故るべん。脱が小狗の奇瑞とのみ所の術とも用ひ色

その赤心とも知りつべんが然るに疑ひとなんや。およそ人ありて孤疑深ければ大
なる災害あり。既に来る事を遅とまるこのあるべきと呼立れて今かとも。進
退谷まりぬ。吾まこと一個の壮夫なり。任意天魔鬼神なりとも。何ぞ怖
るべんと心を励まして後左右が眼を配りてかの経路を。測とも後ひ
五六町も来りぬ。右の面より炬火を照して。喘ぎく来るものは年まだ二十四五なる
女。面貌柔和の若侶なるが。夢昇とうるはしく膝ぶりて。尚が君の命が
ありて。此処に来りとはんとをるべ。庵の裡が在さるべき処此処探りて求らせ。かくと安
より。見て来るべき。炬火を燃して安さるべ。その方角を定め難て。呼吟歩行ひ
しべ。悪るべき言葉とて。とんきりて安堵せり。と額着が夢昇は微笑て今が拙
なる汝が好言葉。くこと然いなき。汝も知るべく乃人より。飛と翔りて勝の体道
術を学ん得てるまべ。何の柔弱者とあるべん。況あの廣綱あるべ。と面答て

その侍と先ふ立ち歩みぬ。行去ひとり足ならのことと雖。何さ水異ーきりのあ
ある。殊ふ夢幻絵ゞ絶ぬるふ。以前の廣綱ゆゑあるとかとうくとそうべ多田
前司。廣綱ゆゑあるんぞくん。倘然もあるべ愿ふ稀なる。奇遇なりと
宵ひ。半と知ひ解るるふ足の進まも捗ませ。後まへせでと走るるふ再行ぞる
まの尾とる美ふけむ。松柏いとも荒りてる。その侍ふ些細るる。枝折戸ある然夢
茅ハ指ぞ。とまぞ吾ぶ閑居せる。草の庵ふゆぞ。妻来弦共ふ入ゆくと先ふ立て
りるまぶ。行者も来得柴の戸と。推開きて程ふ入る。畢竟こまとり行るる
ある。次の巻と讀めんあるべ〜

朝夷巡島記全傳第八編巻之二終

早稲田大学図書館
011888007522